

古賀智敏先生を偲んで

グローバル会計学会長
法政大学名誉教授
菊谷正人



金城大学教授・神戸大学名誉教授であり、本学会理事であった古賀智敏先生が、令和7年5月5日に逝去された。巨星墜つ。

享年77歳である。後期高齢者になろうとも、まだまだ研究・教育に強い意欲を滲まされていただけに、無念であったであろうと拝察できる。毎週掛かってくる電話でも、「お互い80歳まで現役で頑張ろう。」と話されていました。奥様のお手紙には、次のような一文が認められていました。

「お陰様で、無事に主人の四十九日の法要が終わり、時間が経つのが早すぎるように感じるこの頃です。書斎に入ると、頭の中で整理していたのか箇条書きで組み立て中の文章や書きかけの図が出てきました。本人は、もっとやりたい研究があると言っていましたので、とても悔しかったかと思います。」

いつも最新の研究テーマに果敢に取り組み続けていただけない、やり残した仕事・論題がまだまだあったものと確信できる。たとえば、グローバル会計学会・租税実務研究学会共編『会計・税務グローバル化の功罪』（千倉書房、令和8年4月公刊予定）を二人で編集する予定であった。既に単著書として『デリバティブ会計 実質優先会計の展開』（森山書店、平成8年）、『価値創造の会計学』（税務経理協会、平成12年）、『知的資産の会計 — マネジメントと測定・開示のインターラクシオン』（東洋経済新報社、平成17年）、*Japan GAAP Guide* (CCH Asia Pte. Limited, 2006)、『グローバル財務会計』（森山書店、平成23年）等、さらに編著書として『予測財務情報論』（同文館出版、平成7年）、『経営革新ケーススタディ』（東洋経済新報社、平成13年）、『ファイナンス型会計の探究 — 金融商品・デリバティブを中心とする会計のあり方』（中央経済社、平成15年）、『財務会計のイノベーション — 公正価値・無形資産・会計の国際化による知の創造』（中央経済社、平成21年）、『IFRS時代の最適開示制度 — 日本の国際的競争力と持続的成長に資する情報開示制度とは』（千倉書房、平成23年）等、多数の学術書・啓蒙書を上梓されている。終始一貫して、最新の研究論題に対して高邁な見解を開陳され、自説を世に問われていた。

前述の『IFRS時代の最適開示制度』には古賀先生から書評（『リエティ・ハイライト』第38号、平成24年）を依頼され、次のように批評していた。

「IFRSが採用している原則主義・公正価値会計・経済的実質優先主義等により、裁量範囲や予測・見積

計算等が拡大し、情報リスクが増大することになるが、記述的リスク情報の充実化による対応が提示されている。公正価値評価のボラティリティや非財務情報開示の役割については、たとえば、知的資産情報、CSR 報告書等による非財務情報の重要性が指摘され、財務情報開示と非財務情報開示の統合化が示唆されている。非財務情報開示と内部統制と相互関係は、経営者のマネジメントと監査人のリスク評価の視点の相違はあるが、リスク・マネジメントを媒介として密接な関係を持ち、リスクの評価・統制・監視・伝達を対象する点では共通する。本書では、財務、非財務、内部統制および監査の各制度の相互補完関係に注目し、日本型最適開示制度の課題が広範に検討されている。」

このように、古賀先生の研究領域は広範囲であり、周知の如く、デリバティブ会計、国際会計、知的資産会計、統合報告等のパイオニアとして活躍された。その内容は格調高く、かつ、重厚であり、緻密かつ謙虚な研究態度、不断に研究を重ねる御姿は敬服に値する。

私事ながら、筆者が初めて古賀先生にお目にかかったのは、平成9年11月に東亜大学で税務会計研究学会第9回大会が開催された下関市の河豚料理店であった。統一論題「減価償却」における「減価償却の対象資産」というタイトルで報告した後に、友人二人（大東文化大学の前川邦生先生と東京工芸大学の狩野一久先生）と河豚鍋を楽しんでいた時に、偶然に古賀先生一行三名（甲南大学の河崎照行先生と近畿大学の浦崎直浩先生）が入店された。面識があった浦崎先生の提案で一緒に会食することになった。同じ九州出身であるご縁で、以来、研究会・学会等で再会しては、親しく付合いをさせて頂いた。とりわけ、武田隆二先生（当時、大阪学院大学教授、神戸大学名誉教授）の研究会に大阪学院大学に出張したり、古賀智敏先生を中心にした研究会で神戸大学・同志社大学等に出かけた際に親交が深まっていきました。また、古賀先生が講演・研究会等で東京に出張された際には、東京駅前新丸ビルの寿司店・中華料理店で会食し、最終便に近い新幹線で帰宅されていました。会うたびに必ず「菊谷さんは盟友だから」と言って頂き、学会人として大変光栄に思っていました。

古賀智敏先生は昭和22年9月27日に福岡県で出生され、高校卒業まで福岡県で過ごされた。昭和46年3月に山口大学経済学部で卒業されると、神戸大学大学院経営学研究科修士課程に進学され、故武田隆二博士に師事されている。昭和48年3月に修了される同時に、博士課程に進学されるも、在学中に渡米された。昭和49年から昭和50年までミシガン大学経営大学院MBAプログラムに留学され、その後、イリノイ大学経営大学院に進まれ、昭和51年に会計修士号(MAS)を取得されている。昭和54年には、米国大手会計事務所であるクーパーズ・ライブランド会計事務所のニューヨーク監査部門に勤務され、昭和55年から56年にかけてはアーサー・ヤング会計事務所ニューヨーク税務部門で活躍されている。さらに、昭和56年には米国公認会計士(ニューヨーク州)に登録された。翌年に龍谷大学経営学部へ赴任され、平成6年に神戸大学経営学部へ教授として移籍された。平成22年に神戸大学を定年退官された後にも、同志社大学商学部特別客員教授を経て、東海学園大学経営学部教授・副学長に就任され、さらに、金城大学総合経済学部の教授として現役を貫き通されていました。なお、平成3年には「情報監査の構造と展開に関する研究」で神戸大学より博士(経営学)の学位を取得されている。

しかも、国際会計研究学会会長、日本知的資産学会会長、日本会計研究学会理事、日本会計研究学会太田・黒澤賞審査員、税務会計研究学会理事、グローバル会計学会理事、あらた監査法人基礎研究所研究員、TKC研修所顧問、経産省中小企業政策審議会臨時委員、事業性評価教育振興会代表理事等を歴任され、会計学会・

実務界に多大な貢献を残されている。

本学会の立案・創立に多大な協力を尽くされた上に、学会発展のために寄与されていた超一流の研究者を失うことは誠に残念至極である。逝去されて半年以上経っても、「古賀先生ロス」に陥ったままである。盟友として心から哀悼の意を表し、安らかに永眠されることを祈念するほかない。

古賀智敏先生の御法名は、「智海院釋敏證」である。御法名が示すとおり、広く深い海のように深淵な智慧をもって敏活に研究・教育され、会計界の発展とともに会計学に新たな智慧を与えられた。研究者・教育者として研究・教育に情熱を注ぎ込まれた古賀智敏先生の慈愛に満ちた面影を偲びつつ、御冥福を心より祈る次第である。

九拝 合掌

令和7年12月16日

弔 辞

学問の盟友・古賀智敏先生に謹んでお別れの挨拶を申し上げます

五月五日に古賀先生のご逝去の報に接し、驚天動地、頭が真白になりました

あまりに急な訃報に茫然自失になったのは私だけではないと思います

昨日のお通夜に参列し、柩に納められた先生を拝見し、やっどご逝去を認めざるを得ませんでした

ご家族・ご親族の悲しみはいかばかりかと拝察致します

謹んでお悔やみ申し上げます。

周知の如く、古賀先生は国際会計研究学会会長、日本会計研究学会の理事・学会賞審査委員、日本簿記学会理事、グローバル会計学会理事等を歴任され、会計学関連の学会に多大な貢献と功績を残されました

古賀先生と初めてお目にかかったのは、下関の東亜大学で税務会計研究学会が開催された平成九年十一月でした

それ以来、三十年近く、同じ九州出身であるというご縁で親しく付き合って頂きました

超一流の学者であり、学問には厳しい先生でしたが、歓談・会食中には先生独特の笑顔で、時折、冗談を連発されていました

先生は、喫茶店でのコーヒーとケーキを好まれましたが、居酒屋一辺倒の私は、古賀先生の場合に限り、喫茶店にお伴をさせて頂きました

講演・研究会等で東京に出張された際には、東京駅前新丸ビルの寿司店・中華料理店で会食し、最終便に近い新幹線で帰宅されていました

会うたびに必ず「菊谷先生は盟友だから」と言って頂いたことをもう聞けなくなるのが、悲しくて堪りません

古賀智敏先生、盟友として心から哀悼の意を表し、安らかに永眠されることを祈念致します

令和七年五月九日

菊谷正人九拝